

仲間からの便り

2016年7月 No.22

過去のプログラムに参加をしたかめのり奨学生の仲間から、近況報告やアジアでの体験を振り返り今感じること、これからアジアへ行こうと考えている人へのメッセージが届きました。

中学生交流プログラム

松山 泰斗 (2014年 インドネシア)

私は高校から弁論研究部に入部しました。弁論とは日常生活で思うこと、世界に向けての私たちの果たすべき役割など、「心の叫び」を聴衆の皆さんに届け、同感していただいたり、考えていただいたりするものです。大会では良い成績を残すのが目的ではなく、聴衆の皆さんの心をいかに動かすかということを考えています。その為に、文章作成の際にも必ず取材をして、足を使って原稿を書いています。インドネシアに行くまで私は何か感じる事が自分の中にあってもそれを発信するということはありませんでした。しかし、経済発展の著しいインドネシアの影の部分を目の当たりにしたとき、日本に帰ったらこれは伝えなくてはならないと思ったのです。これからも「心の叫び」を発信していきたいと思います。

インドネシアへ行かせていただいてから二年が過ぎようとしています。今でもホストファミリーや参加したメンバーたちと連絡を取っています。参加して満足するのではなくプログラムで得た経験を今後の人生に生かしていくことが大切です。これから参加される皆さんは、プログラムを「ゴール」ではなく「人生のプロセス」と捉えて参加してください。参加して満足するのではなく経験を今後の人生に活かしてください。必ず人生のアドバンテージが得られます。

伊藤 光雪 (2015年 タイ)

私は中学3年生となり、吹奏楽部部長となりました。そのため、部活に力を入れて活動しています。また、将来の夢は翻訳家になることで、英語の本を読んでいます。スターウォーズを読み終え、次はシャーロックホームズに挑戦しようと考えています。また、高校生になったら一年間留学したいので、留学についても真剣に考えて始めています。

学んだことは英語を使うのは楽しいということです。違う国でもコミュニケーションを取れることに、感動しました。また、今回、アジアを体験したので、同じアジア圏でもこれほど文化が違うのかということを知りました。これから

齋藤 向日葵 (2015年 タイ)

スペイン人の留学生ラケルが1ヵ月間私の家にホームステイしました。ラケルは16歳で、日本語が上手な、日本大好きな子でした。今回、ホストファミリーとなり、留学をするラケルがとても楽しそうに留学に興味を持ちました。また、スペインの文化を沢山教えてもらったり、一緒にゲームしたりと短い1ヵ月でしたが一生の友達になりました。

タイに行く上で「先入観を捨てて」タイの文化を肌で感じられたことが嬉しかったです。日本ではありえないことでも、先入観を捨ててなんでもチャレンジした体験が、今の私に自信を持たせてくれました。最近は学外の活動に積極的に参加しようとしています。タイへ行って「実際に体感する」ことがどんなに大事なことが分かりました。

平嶺 葵 (2014年 インドネシア)

プログラムに参加し、自分の英語を話す力のなさに気付き、より一層英語の勉強に力を入れるようになりました。具体的には英検を受験したり、クラブ活動のESS (English Speaking Society)部に入りました。また、自分の世界の小ささにも気づきました。学校や家庭の中だけの世界に満足していた私にとって、1週間のインドネシアでの日々はとて大きいものでした。

同じアジアでも国が違えば文化は全く違うものです。日本人としては理解しがたい文化もたくさんありますが、そういうものも受け入れるともっと自分の世界が広く鮮やかなものになると思います。



留学生のラケルと

新井 菜々美 (2013年 ベトナム)

かめのり財団が主催するプログラムに参加するまでは「ベトナム」という国を全く知りませんでした。私が現地ですでに得たものは、ベトナムがどんな国なのかという知識だけではありません。私を快く受け入れてくれたホストファミリーとの出会いが一番です。ホストシスターとは今でも連絡を取り合い、互いの国の事を学びあっています。彼女は他の何にも代えることのできない大切な存在です。

昨年の夏、私はポルトガルで行われたサマーキャンプに参加しました。10ヵ国から集まった同年代の40人と3週間を過ごし、様々なアクティビティやディスカッションを通して国籍が違う子たちと仲良くなるだけでなく、それぞれの国事情や日本との違いも学ぶことが出来たとて貴重で素晴らしい体験でした。私の世界が少しずつ広がっています。



タイ研修について学校で発表

プログラムに参加を考えている人へ伝えたいことは、ためらわないことです。その国でしかできないことがたくさんあります。「ためらい」のために、行わないのはもったいないです。ためらわずにチャレンジするということが、より多くのことを学ぶ手立てとなると思います。

高校生カンボジアスタディツアー

宮下 加奈子 (2015年 カンボジア)

高校生として最後の年を迎えているいま、進学先を選ぶことにカンボジアでの経験が少なからず役立っていると実感する時があります。将来は教育の分野か、生物学の道に進もうと考えています。どちらにも共通して言えることは、世界の生活水準の上昇に役に立つということです。活気がある日本を知らない私たちの世代が、学習への意欲あふれる人材や豊富な資源など、好条件の揃った発展途上にある国々と、今後対等に結び合えるような環境をつくるには、教育と生物学の分野で環境の秩序を保つという貢献が必須だと思います。それは日本に関してだけでなく、周辺諸国にも言えることです。

さらにカンボジアで出逢った学生たちの勉

強への意欲は、国の発展を大きく助長していると感じます。

アジアと一言と言ってもその中には貧困層と裕福層があり、勉強できる人とできない人がいます。一見何の共通点もない人々と私たちは常に手を伸ばせば触れあえる距離にあります。唯一わかりあう手段というのは、実際に「違う」人たちと接することです。多くの情報にさらされている私たちに、「生の体験」がどれだけ貴重かは知る由もありません。しかしその貴重さというのは、実際にやってみないとわかりません。機会があれば好奇心だけで飛び乗って欲しいと思います。そこで得たものはいつ役に立つのかわかりません。そもそも役に立つのかもわかりません。でもきっと、

現地の高校生との交流



自分では気がつかないうちに内面では大きな進歩を遂げているのではないかと、そんな気がします。

にほんご人フォーラム

塚本 創悟 (2015年 マレーシア)

私は高校3年生になり、残りわずかとなった部活や体育祭で応援団を務めることになるなど、充実した学校生活を送りつつも、“受験生”としての第一歩を踏み出し、志望校合格に向けた勉強も始めています。

私はプログラム参加後、学校のSGH(スーパーグローバルハイスクール)の研修旅行で、フィリピンのマニラ周辺地域を訪問しました。国民の6割が貧困層であるフィリピン農村部では、労働者の出稼ぎにより、代わりに子どもたちが働くため、学校にいけないといひます。さらに、初日に訪れた貧民街では、子どもたちがまだ学校に行けていないケースも多く存在することを知り、非常に心が痛みました。

私は、以前から教師を志しています。しかし、もう一つ目標ができました。それは、平等教育を実現させることです。平等というのは、機会も質もすべてです。子どもたちが平等に教育を受けられないことが、様々な問題を引き起こしているとも考えられます。この問題の解決に、将来、自分が少しでも貢献できればと考えています。

私は、プログラムで訪れたマレーシアが最初の海外渡航だったため、すべてが新鮮でした。最初に英語という壁にぶち当たりましたが、臆せず話してみることで乗り越えること



パキスタン人の友人と

ができ、今では日常会話か、それ以上の英語を話すことができると自信をもって言うことができます。心と心が通じ合えば、文法なんて関係ない。これは、声を大にして日本人に言いたいことです。また、これからプログラムに参加する人は、ぜひ、日本について、深く深く予習してもらいたいと思います。私たちが多くを吸収したいと思ってプログラムに参加するように、他の国の参加者もみな、少しでも日本について我々から吸収しようと待っています。彼らは、「日本人」である私たちに、大きな期待を持って来ます。私たちもあくまで一参加者だということを忘れずに行くといひと思います。

山本 光希 (2015年 マレーシア)

私は今年の7月末から8月初めにかけて福岡県で行われる、「日本の次世代リーダー養成塾」に北海道代表として参加できるようになりました。養成塾の中では、マレーシア元首相であるマハティール氏の講演を聞く機会もあり、今からとても楽しみです。また、先日JICAが主催する、高校生エッセイコンテストで国際交流特別賞を頂きました。リーダー塾にせよ、エッセイコンテストにせよ、マレーシアでの経験が本当に大きく味方してくれています。正直将来はまだわかりませんが、でも、一つの夢、「国際公務員」にむけて、これからも努力を続けていきたいと思ひます！

アジアというのは本当にあっただかい！日本で「アジア」って聞くと、なぜかとっさに頭をよぎるのは、「中国・韓国」。そして次に頭をよぎるのは「反日デモ」。最近は大分薄れてきましたが、ついこの間まではそんな考えを持っていました。でも、アジアは実はもっと広い。肌の色で区別するつもりはありませんが、やっぱり同じ肌の色だと安心します。料理は少し刺激的ですが、本当においしい。日本は外国というとすぐに欧米を見てしまうけれど、それ以前に日本はアジアの一員なのだから、アジアに誇りを持って世界に出て行くべきだと思います。

高校生短期交流プログラム

畑中 琴葉 (2012年 韓国)

現在、韓国の延世大学で学んでいます。私が今の大学へ進学するきっかけになったのは、奨学生としてプログラムに参加させていただいたのが一番のきっかけでした。高校一年生の夏に1ヶ月留学した韓国で、初めて見た大学がこの延世大学でした。私は今、その夢の大学でグローバルな友人関係を築いています。そして、大好きな服について学びつつ、ダンスを一生懸命練習しています。私の将来の夢は世界中を自分の目で見て回ることです。

このプログラムに参加したことによって、世界中に友人ができ、多文化に触れる機会を得ました。また、高校時代にその基盤を作っていたことで、今どんな場所で、どんな人とも打ち解け、仲良くすることができていると思います。私にとってこのプログラムは、自分の世界を大きく広げてくれた素晴らしい宝物です。もしプログラムへの参加を少しでも迷っているなら、必ず応募するべきだと思います。

篠原 由衣 (2009年 韓国)

現在、JICA 青年海外協力隊として中米ニカラグアで活動しています。大学を卒業し、一般企業に勤めましたが、小学生の頃からの夢であった青年海外協力隊にチャレンジしたい、自分の夢ややりたいことに突き進む人生がいいと、会社を辞め、青年海外協力隊になる道を選びました。今の生活も苦しいことは楽しいことの10倍ありますが、自分がやりたかったことで、自分で決めて来たからこそ充実しています。

ここでは教育機関が十分ではなく、英語や医療知識、パソコン技術等を学ぶにはわざわざ何時間もかけて街の教室に行かなければなりません。さらに、私の任地では特に仕事数が少なく、働き盛りの若者が1日中道にたむろし、酒を飲み煙草を吸っています。そこで、私にできることは何かと考え、英語の教室を始めました。アメリカに近いこともあり、英語ができれば出稼ぎのチャンスも増え、ニカラグア国内でも良い給料の仕事に就ける可能性が高くなります。また、視野を広げ、「世界にはこんな言葉

を話す国もあるのだ」と興味を持ってもらうため、日本語も教えています。今では周辺の山岳地帯のコミュニティからも山を下って私の教室に来てくれる若者もいます。任期は2年ですが、責任を持って最後まで授業を続けようと思います。

全ての始まりが高校生の時の韓国留学でした。当時、まだまだ近くて遠い国であった韓国で、私と同じ十代の子達はどんなことを考えて、どんなものが好きで、どんな物を食べているのか知りたかったのです。韓国留学が初めてひとりで行く海外、初めて親元を離れて暮らす経験でしたが、それを乗り越えられたことで図太くなれたし自信ができました。大学に入ってからバックパックを背負い、30カ国を訪れました。今、青年海外協力隊としてニカラグアで活動している私がいるのも、全てのきっかけは韓国留学が作ってくれたものです。私の視野が一気に広がりました。あのときの自分の行動力と好奇心に賭け、思い切って韓国留学に行って本当に良かったです。

高校生交換留学プログラム(長期)

片井 有紀恵 (2008年 韓国)

時が過ぎるのは早いもので、気がつけば早8年という時間が過ぎ、高校生だった私もこの夏には25歳となります。大学を卒業後、日本語教師としてカンボジアで1年間勤務し、日本帰国後は紆余曲折しながらも、現在は大阪にて貿易関係の仕事をしております。

イタリア等との取引が多いため、留学中に一生懸命勉強した韓国語ではなく、英語を使っての業務となっています。社会人3年目、留学中の私から今の自分を見たら、随分大人になったように見えるかもしれません。

あの頃に出会った縁は今もとても大切にしており、今月には現地のクラスメイトが日本に遊びに来ますので、2年ぶりの再会となります。社会人になったこともあり、学生時代のように海外旅行をする時間はなかなかとれませんが、また韓国に訪れたいという気持ちは常に持っています。留学中のまだ幼くがむしゃらに頑張った日々も今ではとてもいい思い出となっています。これからもたくさんの高校生が、アジアで多くの学びを得られるように願います。

今泉 美里 (2011年 タイ)

2014年から、タイのタマサート大学、タープラチャンキャンパスで政治学を学んでおります。今は2年生ですが、8月からは3年生になり、ますます学びを深める事ができ嬉しいです。また、大学から2015年度の成績優秀者賞(Dean's List)を頂き、ますます勉学に力を入れています。大学でも良い友達に恵まれ、タイ人の明るさや優しさを感じる日々です。

高校とはまた違って、大学では意見交換をし、社会問題について深くタイ人と話す機会があり、タイ人の一面を知ることができとても興味深いです。日本でも大学生活を送ることができですが、またタイに来て良かったと強く感じております。

プログラムに参加したのがもう5年も前の事かと思うと、本当に驚きです。しかし、5年も前の事が今日の私を動かしていると思うと、やはりプログラムに参加した事は私の人生の中で大きな出来事であったと思います。

私は、大切な事は多くの視点から物事を見て、考えることだと思います。違いを理解し、受け入れる柔軟性はどんな所でも必要です。

大学のフィールドトリップにて友達と



2011年の留学は、それを教えてくれました。

日本にいただけでは、日本で当たり前的事、当然だと思われる事ばかりに出会います。しかし、一步日本の外に出れば、当たり前など通じません。でも、そんな中でもがいて、苦しんで、感じて学んだ事は、日本には絶対に得られない宝物です。タイへの留学は、私の視野を大きく広げてくれました。

もしプログラムに参加したい方、参加しようか迷っている方がいれば、こう言いたいです。海外留学が、楽とは言いません。不安になったり、辛かったり、たくさんの壁にぶつかります。でもその分、日本では得られないかけがえのない経験ができるはずですよ。

勇気をもって一步踏み出して下さい。

かめのり地球青少年サミット [KEYS]

篠原 賢典

(2013年 KEYS Japan 2013)

現在私は、大阪大学外国語学部ヒンディー語専攻の4年生となりました。ヒンディー語はもちろんのこと、英語、フランス語、チェコ語など様々な言語をちょっとずつ勉強しています。また今年、長年の目標であった交換留学が確定しました。派遣先はイギリス シェフィールド大学です。語学面では勿論、専門的で高度な授業に切磋琢磨し、また現地ならではの経験を沢山積んでいきたいと意気込んでいます。

課外活動では、TEDxOsakaUに所属しています。これはかの有名な世界的プレゼン組織TEDの下位組織で、Ideas Worth Spreadingという理念は変わらず、ここ大阪大学でアイデアの交流イベントを行っております。

「かめのり地球青少年サミット」で出会った仲間とは現在も交流を続けております。彼らが日々学び、挑戦する姿をSNSを通して眺め、大きな刺激を受けています。アジアの未来・展望を考えるというテーマは、我々日本人にとって身近でありながら忘れがちなものではないでしょうか。サミットに参加して私は改めて、途上国と呼ばれる仲間たちが大きな情熱をもって勉学に励んでいることに気付きました。彼らにとって私は外国人ですが、「発展の手助け」という立場ではなく、共に国の未来を支えていく人材なのだという意志が、今後のアジア社会をより良いものに変えていくと思います。そのためにはまず異文化理解が大切です。本プログラムのような交流の機会が、今後更に増え一般化していくことを願っています。

米山 水月

(2013年 KEYS Japan 2013)

KEYSに参加したあと、ハンガリーに1ヵ月半、アメリカに9ヵ月ほど、大学の研修制度と交換留学制度を活用して行きました。KEYSに参加して国際交流への興味も強まりましたし、異なるバックグラウンドを持つメンバーと一緒に学習しアウトプットすることの楽しさを実感することができ、より海外志向が強くなりました。就職活動でも企業選びの軸として海外とのつながりがあるかどうかを掲げており、できれば仕事で海外に実際に行く機会も得たいと考えております。

KEYSのメンバーとの交流は続いており、海外にいるメンバーが訪日した際に都合のつくメンバーで集まっています。メンバーのKEYS後の活躍を聞くと、いかに参加者が優秀だったのかが分かります。KEYSは何度でも参加したくなるようなプログラムでした。来年から社会人になってしまうので難しいですが、もし学生のうちにまた機会があったらぜひ参加したいです。

校舎前で留学修了
証明書をもって



石川 杏奈

(2013年 KEYS Japan 2013)

大学院では、ベトナムの首都であるハノイにおいて近代住宅開発が交通行動に与える影響について研究しています。現在、就職活動を行っており、まだ修了後に勤める企業は定まっていません。将来活躍したい業界として視野に入れているのは、開発コンサルタントです。私の専門分野である都市計画を活かして、途上国に貢献したいという強い思いを持っており、途上国において公共交通の利用を促すような計画や施策を提案することによって、途上国の都市において渋滞の緩和を図り、生活環境の改善に寄与したいと考えています。

本プログラムの存在を知った時は、国際問題についてより知識を深めたいと考え興味を持ったのですが、建築を専門分野にしている自分がちゃんと他の学生と議論できるか不安になり一度応募を躊躇しました。しかし、何事も勉強、吸収する姿勢で応募し、参加しました。やはり、国籍や言語が異なる学生と意思疎通を図ることは容易ではありませんでした。また、理系の私にとっては、大半を占めていた文系の学生より問題に対する意識が浅く、話し合いについていくのに必死でした。しかし、それ以上に得たものは大きかったように感じます。このプログラムを通じて、専門分野を問わず皆が世界で起きていることに常にアンテナを張る重要性を学びました。国際問題の解決には、多くの方がグローバル社会の一員としての意識を持ち、世界で起きていることについて主体的に考える姿勢をとっていくことが重要課題のように感じます。私も問題意識を持ち続けて、将来にはアジアに貢献したいと考えています。



TEDxYouth@Kobeに参加(写真左)

新井田 理恵(旧姓 遠藤) (KEYS Japan 2010 / KEYS 2011 香港)

大学生の多感な時期に参加できたこと、素晴らしい出会いに恵まれたことに心から感謝しております。私はプログラムの一環として、インドシナ難民の方々が無事神奈川県のいちょう団地への訪問、そこで暮らす難民の方々との出会い、そして夢を語る仲間、温かく見守ってくださるかめのり財団職員の方々との出会いを得ることができました。それらに大きく後押しされ、大学卒業後からは日本に暮らす外国人の方々の生活に関連する仕事についています。また、出会った仲間とは、現在でも近況報告を

しあって交流を続けています。

就職活動、その先の仕事を考える上で、自分がどんなリーダーになりたいのか、ということは何度も考えさせられました。このプログラムは、必ずしも声の大きい人、相手を論破する人を是とするのではなく、異なる意見を持つ人とも対話ができる人を育成するものだと感じています。日本・世界が直面する問題、答えのない問題に取り組みたいという果敢な大学生の皆様にも、ぜひご参加頂きたいと願ってやみません。